

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520351

研究課題名(和文)タミル古代の詞華集『十の長詩』の批判的研究

研究課題名(英文)Critical Studies of the PattuppaaTTu (an ancient Tamil anthology)

研究代表者

高橋 孝信 (TAKAHASHI, Takanobu)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：10236292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：当初の予定どおり、詞華集『十の長詩』3552行を通読し、仮の邦訳に訳注を完成した。それに基づき、伝統的に「詩人・芸人のための案内記」と言われてきた作品が、実は一般人のための「旅行ガイドブック」であること、そして、そのような「案内記」を含む10の作品すべてが、古代の旅行記であることが新たに分かった。

また、30年来頭を悩ませてきた、タミル古代の「声の文化」にも新知見を得ることができた。したがって、誰がどこでどのように作詩し、どのような場でどのように作品を披露したかについても分かってきた。そして同時に、「声の文化」と対の関係にある、古代の「文字の文化」のようすもかなり分かってきた。

研究成果の概要(英文)：I have read the full text of PattuppaaTTu ("Ten Songs"), an ancient Tamil anthology, and made a tentative Japanese translation and notes. On the basis of the reading, I could find that the so-called guidebooks (aaRRuppaTai) were not for bards, as traditionally maintained, but for ordinary people, and other works contained in the anthology also have the same nature. During the course of the study, I got a new idea as to "oral" culture, which leads me clear views on how poets-bards composed poems and how and where poems were recited. Orality is an inseparable issue from literacy. In this connection, I have found reliable evidence that letters were widely used in ancient Tamil society, at the latest, in the 3rd century CE.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：その他の外国語 インド文学 タミル文学 インド古代社会 詩人 旅芸人 声の文化 旅行文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 特定領域研究(A)(2)「タミル古典の文献・写本・電子ファイルに関する情報および現物の収集」(平成11~14年)、基盤研究(C)(一般)「タミル最古の文典『トルハーッピヤム』詩論部分の訳注研究」(平成15~17年)、基盤研究(C)(一般)「タミル古代の英雄文学の再検討」(平成18~21年)等で、当該研究の下準備が進んでいた。

(2) すなわち、当該研究に必要な電子ファイルはすでに入手済みであり、古典文学の背景をなしている詩論についても、上記の基盤研究で研究を行っている。さらに、古典文学には恋愛文学と英雄文学という二大ジャンルがあるが、恋愛文学は筆者の専門であるからすでに十分な知識をもっており、後者の英雄文学についても、上記基盤研究によりそれなりの研究が済んでいた。

## 2. 研究の目的

(1) 筆者のライフワークは、タミル古典(古代文学、後1~3世紀)の総合的理解、及びそれをもとにした古代の文化・社会の理解である。タミル古典は、過去百年にわたって様々な角度から研究されてきたが、それらの研究には大きな問題がある。それは、現地のタミル人研究者があまりに伝統的解釈にこだわり批判的精神を持っていないこと、他方、欧米の研究者は過度に批判的であり伝統的解釈をまったく排除していることで、この傾向は近年ますます顕著になってきている。

(2) そこで本研究では、注釈に顕著に現れた伝統的解釈を批判的に検討しつつ、古典でももっとも当時の社会の様子を生き生きと描いた『十の長詩』を読解し、タミル古典ならびに古代社会の理解を深めることとした。

## 3. 研究の方法

(1) 注釈には、注釈家独自の見解や思い込みが書かれていることもある。他方、どのような言語であれ、現地人の語感をもっとも優れているのは間違いないし、現地社会をもっと

もよく知っているのも確かである。

(2) 本研究であつかう『十の長詩』(後2世紀末~3世紀初頭)には、14世紀の優れた注釈がある。これまで、欧米の研究者は、原典と1000年以上も離れた注釈は、古典期の様子を表していないと考えているが、実は注釈の伝統は脈々と受け継がれて来ていることが分かった。したがって、14世紀の注釈といえども、その注釈の伝統が結実したと考えるのが妥当である。ただし、上にも述べたように、注釈家独自の解釈もあるので、古典文学の用例に広くあたって、注釈の可否を慎重に見極めつつ、原典解読を進めた。そのような作業によって、タミル古典や古代社会の様子は、おのずから明らかになる。

(3) とはいえ、古典は文法や語彙の知識だけでは読めない。ことに『十の長詩』には、南インドの古代社会の様子が詳しく描かれているから、動植物・楽器・農耕具・天文学・食べ物・飲み物(ことに、酒)など博物学的知識を要する。その意味で、大図書館(筆者の場合は東大総合図書館)を最大限活用した。

## 4. 研究成果

(1) 上記の研究方法により、『十の長詩』の全篇3552行を通読して仮の邦訳を作り、それに訳注を付すことができた。それにより、10の作品の著された目的が「詩人・芸人のための案内記」という、伝統的に言われてきたものとは異なり、一般の人のための「旅行ガイドブック」のようなものであったことが分かった。

(2) 『十の長詩』には、詩人・旅芸人の様子が詳しく描かれている。他方、30年来頭を悩ませてきた、タミル古代の「声の文化」についても新知見を得ることができた。そこで、それら2つの知見をあわせて考えることによって、タミル古代において、どのような人がどこでどのように作詩し、どのような場どのように作品を披露したか、またいったん披露された後に吟唱詩人や旅芸人によって広

められたであろうことについても、有力な仮説を立てることができた。

(3)「声の文化」の実態を知るには、当時の「文字の文化」の存否を含めて、その実態も分からなければならないが、これについても本研究をつうじて、後2～3世紀には「文字の文化」がかなり浸透していたことが新たに分かった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計3件)

高橋孝信、「詩作の場、発表の場 「声の文化」と「文字の文化」との関係で」, 『万葉古代学研究所年報』第12号, 万葉古代学研究所, 檀原, 2014.3.31, 105-110頁。

高橋孝信、「古代タミルの塩の道」, 『万葉古代学研究所年報』第9号, 万葉古代学研究所, 檀原, 2011.3.31, 135-144頁。

T.Takahashi, “Jain Authorship in Tamil Literature: A Reassessment”, 『インド哲学仏教学研究』17, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部・インド哲学仏教学研究室, 2011.3.31, 1-12頁。

### 〔学会発表〕(計3件)

高橋孝信、「詩作の場、発表の場 「声の文化」と「文字の文化」との関係で」, 第10回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム「万葉古代学の飛鳥」, 万葉古代学研究所, 檀原市, 2013.10.6.

高橋孝信、「象か子牛か 異読に関する一考察」, 日本印度学仏教学会第64回学術大会, 島根県立会館, 松江市, 2013.9.1.

高橋孝信、「文学と旅 南インド古代の事例から」, 第7回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム「人はなぜ旅を

するのか 万葉集と世界の旅」, 万葉古代学研究所, 檀原市, 2010.10.11.

### 〔図書〕(計2件)

高橋孝信、「象の滝 直訳と翻訳の間で」, 『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』, 佼成出版社, 東京, 2014.3.30, 205-213頁.

T.Takahashi, “Is Clearing or Plowing Equal to Killing?: Tamil culture and the spread of Jainism in Tamilnadu”, *Bilingual Discourse and Cross-Cultural Fertilisation: Sanskrit and Tamil in Mediaeval India*, ed. by Whitney Cox & Vincenzo Verigiani, Institut Francais de Pondichery/ Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Pondicherry, 2013, pp. 53-67.

### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称: 発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

### 〔その他〕

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/indlit/tamil/index.html>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

高橋 孝信 (TAKAHASHI, Takanobu)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 10236292

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：